令和４年度第１回きこえエール新潟勉強会　＜アンケートに寄せられた質問＞

「難聴児と共に歩む～難聴通級指導教室の立場から子どもたちを支えて～」

講師　糸魚川市立糸魚川東中学校通級指導教室

教諭　久我　かおり　様

Q：　難聴通級指導教室担任＞

人工内耳を装用しているお子さんの担任の先生から、「独り言が大きい」「自分の出す物音に無頓着」と、コメントをもらうことがあります。その理由や改善方法についてご助言いただけますとありがたいです。

A:久我先生

お子さんが「自分の出す音に無頓着」な理由は、お子さんの年齢や装用開始年齢、聴覚活用の状態によっても違うと思いますが、そのお子さんが人工内耳を外したら、重度の聴覚障害児だということをかかわっている方々に忘れないでいただきたいと思います。

補聴器と同様に人工内耳を通して聞いている音は私たちが聞いている音と同じとは限りません。人工内耳装用児は限られた電極数で対応した音情報を日々の学習によって有意味な情報にしています。「この音は〇〇の音だ」と理解するためには意図的な学習が必要なのです。このお子さんは自分が出している音を意識する機会が少なかったのではないでしょうか。まずはどのような場面でどのような音を出しているのかを確認してみましょう。それから、お子さんがその音を意識できるように学習するとよいと思います。例えば、「先生が同じくらいの大きさで独り言を言っている様子を見せて、どう思うか考える」とか、「給食の時にずるずる食べる音を出すというのであれば、その音を実際に聞かせてみる」などです。

自分が出している音の存在を知ることはとても大切です。通級児童生徒なら通級指導の時に、難聴学級の児童生徒なら自立活動の時間に学習するとよいと思います。「無頓着」なのではなく、「気付いていないだけ」だと考えれば、「気付くようにすればよい」だけですよね。

Q：　難聴通級指導教室担任＞

通級児の在籍校で難聴理解学習をする際に、体験型にするようにしているとお話があったと思いますが、もし、使用している教材等ご紹介いただけるようでしたら、教えていただきたいです。

A:久我先生

聞こえにくさの体験で一番簡単なのは、指を自分の耳に入れて聞いてもらう方法です。両耳難聴のお子さんのクラスなら両方に、片耳難聴のお子さんのクラスなら片方の耳に指を入れてもらい、私が教室の中を話しながら歩き回った後、その指を外します。入れて聞いた時と外した後でどう違うか、どんな気持ちがしたかを子どもたちに聞きます。「小さく聞こえる」「ぼわっと聞こえる」「指を入れた方に先生が行ったら、何て言っているのかよく分からなくなった」と言う子どもたちが多いです。単純ですが聞こえにくい感じが伝わります。

もう少しはっきりさせたい時には一定の周波数の音をカットした音源を使っています。「聞こえているけど聞き取れない」感じが伝わります。「賑やかなところでは聞き取りにくい」ことを体験してもらうときには一定の言葉にノイズを重ねた音源を使っています。ロジャーなどの補聴支援システムの良さを伝えるときにも活用できます。これらの音源は先輩通級担当者が残してくださったもので、私はその財産を活用させてもらっています。

Q： 難聴特別支援学級担任

私の受け持っている児童に、教員の指示や連絡、ほかの児童の発表が聞こえたか、何を言っていたかを個別の授業の際に確認をしております。概ね理解しており、本人も「聞こえているよ」と答えてくれるのですが、逆に、どの場面が聞き取りにくいかが、分かりづらい状況です。

今後も、話していた内容を日々確認していき、分りづらい場面や場所を特定していきたいと思いますが、聞き取りでの確認のほかに、試した方がよい方法はありますか？

A:久我先生

「聞こえた？」と聞けば、「聞こえた。」と子どもたちは答えます。実際、音は聞こえているのですから子どもたちは正しく答えています。でも、正しく聞き取れているかは分かりません。難聴児が一番困るのは「聞こえない」ことではなく、「正しく聞き取れない」ことだと思います。だから、先生方は確認をされるのですよね。

お子さんによって確認したい内容が違うので、一概には言えませんが、年齢が低い方が言葉の確認が必要なので、大切なことは書かせて確かめるとよいと思います。例えば、翌日に校外学習に出かけるとしたら、いつ、どこへ行くのか、何を持っていくのか、どうやって行くのかなどをシートにまとめて確認します。その時に、大切なところや聞き取ってほしいところは空欄にしておいて書き込むようにすると、正しく聞き取って理解しているかを確認することができます。

年齢が上がってくると、たくさんの情報の中から必要な情報を正しく聞き取っているかが大切になってくるので、言葉を空欄にするよりも質問形式にして本人が分かった情報を書き込むようにするとよいと思います。例えば、「校外学習について、〇〇先生が話したことを書きましょう。」くらいの大きな枠にしておいて、捉えた情報がどれくらいなのかを確認するとよいでしょう。十分に捉えられていなければ、そのシートにさらに書き込みながら確認すれば安心して校外学習に参加できますよね。聞き取れていないかどうかを確認するよりも聞き取れたことを共有して自信をもたせながら、分かっていなかったところを教えていけば、だんだんと自分の聞こえにくい場面を意識できるようになっていくのではないかと思います。大切なのは「楽しく会話する」ことだと思います。

Q： 大学院生

通級指導教室の担任をしていて、一番のやりがいと大変な事は何ですか？

A:久我先生

これが一番難しい質問ですね。「やりがいは？」と聞かれると難しいですが、子どもたちが元気に通級指導教室にやってきて、楽しく話をしたり、学習をしたりする姿を見ているとうれしくなります。また、今回の自己理解の学習のように積み重ねてきたことの成果が見られると続けてきてよかったなと思います。

大変だと思うことは、日々の通級指導のことを気軽に話したり相談したりすることができないことです。それは、通級担当者が一人しかいないことや、通級指導がまだまだ小中学校に浸透していないことが原因かなと思います。校内の先生方にもっと通級指導について理解していただけるよう知らせていくことも大切だと思っています。

Q： NPO 法人相談支援員

保護者として受け入れること、家庭での接し方など関わっておられることはありますか？

A:久我先生

以前は特に低学年のお子さんの通級指導は保護者同室で行っていました。指導の様子を見てもらいながら難聴の理解を深めてもらったり、ご家庭でお願いしたいことを話したりしていました。コロナウイルスが流行して通級指導そのものができないほどの難しい状況が続いたので、今は基本的には保護者には送迎のみで指導中は待機していただき、指導後にその日の通級の様子をお話したり、学校や家庭での様子をお聞きしたりしています。

保護者の方には難聴であってもお子さんには輝く未来があることをお伝えしています。難聴であっても支援を工夫すれば子どもがやりたいと思うことができることが分かると保護者も安心されます。保護者の気持ちに寄り添い、不安を一つずつ取り除いていけば、保護者もお子さんの難聴についてだんだんと受け入れてくださるのではないかと思います。子どもたちが自分自身の難聴を受け入れるためには、保護者自身もお子さんの難聴を受け止めることがとても大切だと思います。

保護者向けの難聴理解研修や保護者の座談会は、**「耳より会」**でも行っていますが、私の教室でも行っています。

Q： 難聴通級指導教室担任

中学生の片耳難聴のお子さんの支援の実際について教えてください。

A:久我先生

基本的には両耳難聴も片耳難聴も指導内容は大きくは変わりません。

中学生は部活動や塾など放課後も忙しいので、月1～2回程度の通級指導になります。ですから、限られた時間を有効に使うよう気を付けています。1回の通級で3つくらいの課題に取り組みます。1つは行事や季節の話題などテーマを決めて話し合ったり書いたりする課題、1つは自己理解に関する課題、もう1つはそのお子さんに今つけてほしい力にかかわる課題です。でもそれはあくまで大体の計画です。子どもが来た時の様子によって変わることもあります。

片耳難聴のお子さんにする自己理解の学習の1つに聴力検査を自分でしてみて、左右差を感じさせるというものがあります。聞こえないあるいは聞こえにくい耳で反応のあった音を聞こえる側で聞かせます。そうすると、どれくらい聞こえにくいのかを理解しやすくなるようです。私のところにあるオージオメータは学校健診用なので、最大でも70dB しか出ませんが、子どもたちは左右の聞こえ方がこんなに違うのかと驚き、自分の聞こえる側の耳を大切にしようと思ったと感想を書く生徒もいました。

Q： 放課後等ディサービス職員

障害通所施設ですが、人工内耳を入れている利用児さんと手話以外でもコミュニケーションを取りたいと考えています。高揚している状態の時や、してはいけないことを、文字や行動で伝えようとはしていますが、マスクで口元も見えないこともあります。よい方法を教えていただけたらと思います。

A:久我先生

聴覚を活用できるのであれば、音声言語でのコミュニケーションはタイムラグが起きにくいので有効です。ただ、確実に理解しているかを確認する必要があります。手話もそのお子さんが理解できるのであれば合わせて使ってあげると分かりやすいでしょう。

忘れてはいけないことは「人工内耳は性能の良い補聴器に過ぎない」ということです。人工内耳を装用しているだけで聞こえたり分かったりするわけではありません。人工内耳を活用するための学習を積まなければなりません。でも、中には学習を繰り返してもうまく適応できないお子さんもいます。人工内耳がうまく適応しているか確認が必要です。人工内耳を装用しているお子さんは比較的発音も良いため、周囲は聞こえている、分かっていると思いがちです。しかし、必ずしも分かっているとは限らないのです。人工内耳を外したらお子さんはほぼ聞こえないのだということを忘れてはいけないでしょう。

ご質問内容の詳細が分からないので、一般的なことしかお伝えできませんが、言葉でも手話でもうまく伝えられないときは、絵や文字にかいて示すと理解しやすいです。例えば、今やってほしいことを絵に描いて伝えます。「手を洗うよ。それからおやつを食べるよ。」と手洗いカードとおやつカードを続けて見せることで流れも伝えることができます。注意してほしいのは、発達障害など他にも障害のあるお子さんの場合、よいモデルと悪いモデルを両方見せると、悪いモデルの方が刺激的で魅力的なので、そちらの方がより強く記憶されてしまうことがあります。お子さんの状態に合わせて、見せ方の工夫をされるとよいと思います。